

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	清代北京語の「象声詞」：『紅樓夢』と『児女英雄伝』
Author(s)	野口，宗親
Citation	熊本大学教育学部紀要 人文科学，42：1-11
Issue date	1993-09-30
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/984
Right	

清代北京語の「象声詞」

——『紅樓夢』と『兒女英雄伝』——

野 口 宗 親

On Onomatopoeia of the Beijing dialect in the Qing period

—— Honglouloumeng and Ernu Yingxiongzhuan ——

Munetochika NOGUCHI

(Received May 24, 1993)

1 はじめに

清代北京語を反映しているといわれる白話小説『紅樓夢』と『兒女英雄伝』にはかなり多くの「象声詞」（日本語でいう擬音語。「擬声詞」ともいう）が用いられている。特に、『兒女英雄伝』では大量に用いられ、この作品を特徴づける一つの要素となっている。

- ① 可憐公子此時早已魄散魂飛，雙眼緊閉！那凶僧描准了地方兒，從胳膊肘兒上往前一冒勁，對着公子的心窩兒刺來，只聽嘆，“噯呀”，咕咚，鎗啣啣，三個人裏頭先倒了一個。〈中略〉要知那安公子的性命何如，下回書交代。（見 5，56）

（哀れ公子はこの時はや魂が抜け、両目をかたく閉じております。かの悪僧はねらいを定めると、肘まで引いた匕首を公子の心臓めがけ思いきりグサリ！とみるや、ビシッ！ギャッ！バタリ！チャリーン！悪僧三人のうち一人がまず倒されたのでございます。〈中略〉さて、公子の命いかなりましようや。それは次回に読み継ぎといたします。）

柱に縛りつけられた安公子があわやの時、十三妹が登場、弾弓（はじき弓）でもって悪僧を打ち倒す様子が嘆→咕咚→鎗啣啣（短い音→長い音）という象声詞の連用により、緊迫感・臨場感を添えてリズムカルに描き出されている。まるで講釈を聞いているようである。

『紅樓夢』と『兒女英雄伝』の二書の象声詞について、耿二嶺（1986）は「『兒女英雄伝』の方が成立時期が遅いだけ、語音構造の型に幾分かの多様化や使用率の増加が見られる」が、「使用される擬声詞は大部分同じで、現代北京語ともさして違いはない」と述べている。しかし、細かく見てみると、18世紀中葉に成立した『紅樓夢』（80回、曹霑作、高鶚の続作40回を加えて1792年出版）、19世紀中葉に成立した『兒女英雄伝』（文康作、1878年出版）の言語と現代語とでは、同じ北京語の象声詞といっても、やはりかなりの違いが認められるようである。

この論文では清代北京語の代表として二書を取りあげ、象声詞を抽出して語音構造の型に分類し、その特徴や違いを清以前の象声詞や現代語の象声詞とも比較しながら考察した。現代中国語象声詞形成の由来と、その特徴を考える手がかりとしたい。

なお、『紅樓夢』120回の前80回と後40回の作者は異なるので別の作品として取扱い、あわせてその違いも考察した。テキストは中国芸術研究院紅樓夢研究所校注『紅樓夢』（1982年、人民文学出版社、底本は前80回が「庚辰本」、後40回が「程甲本」）及び『兒女英雄伝』（1991年、上海

古籍出版社。底本は光緒4年聚珍堂初刻本)を使用した。引用文は繁体字とし、回・頁を示した。

象声詞の範囲は「嘯嘯，唧咕」など、人の話し声を形容したものも含めた。また「車轆轤，馬蕭蕭」(児 32. 杜甫「兵車行」より)など、明らかに他作品からの引用と見なせる象声詞はこれを除いた。

2 象声詞の型

象声詞は外界の音や声をまねて、言語的に再生したものであるから、その型はどうしてもその言語の造語法の制約を受けざるを得ない。『紅樓夢』及び『兒女英雄伝』に見える象声詞の型は、語形の各音節を ABCD で示すと、次のようなものがある。

- | | |
|------------|------------|
| (1) A 型 | (6) ABAB 型 |
| (2) AA 型 | (7) ABCD 型 |
| (3) AB 型 | (8) ABCB 型 |
| (4) ABB 型 | (9) ABAC 型 |
| (5) AABB 型 | |

AAB 型, ABC 型, ABBC 型などは見られなかった。ABCB 型は『兒女英雄伝』に 2 種類が, ABAC 型は『紅樓夢』に 1 種類が見えるだけである。

次に、それぞれの型について二書に見られる象声詞とその使用回数を表にして示し、その特徴について具体的に検討を加えていく。象声詞は拼音順に並べた。

2. 1 A 型

表 1

紅樓夢前 80 回	紅樓夢後 40 回	兒女英雄伝
嘯・哧(14)*, 嘯(1), 嘯(1), 唸・忽(3)*, 嘯 (1), 拍(1)*, 唸(1), 忒兒(1), 哇(4)*, 呀(1)	嘯(1), 嘯(2)*, 沸(1), 唸・呼(2)*, 咯(1), 拍 (1)*, 唸(1), 哇(1)*	吧(7), 嘯(2), 嘯・哧(8), 嘯(2), 嘯(1), 轟(6), 吓 (2), 嘆(8), 嘯(1), 鏗(3), 嘯(4), 唸(4), 嘯(5), 騰 (1), 嘯(1), 吱(1)
計 10(28)	8(10)	16(56)

注) 嘯・哧(chi)は現在混用されるが、『兒女英雄伝』では嘯が笑い声に、哧が物が風を切って飛ぶ音に分けて用いられる。*は紅樓夢前 80 回・後 40 回ともにあるもの。下線は二書ともにあるもの。()内は使用延べ数。

A 型の象声詞は比較的短い音や動作の素早さなどを表す。現代語では普通であるが、古代語では単独で用いられることは少なく、「噉然」「鏗爾」などと接尾辞をつけて用いられる場合が多い。二書にも、

② 只聽那黑影裏噉然一聲，却飛起一個白鶴來，直往藕香榭去了。(紅 76. 1091)

③ 公子聽了揚起頭來，噉然大笑。(児 30. 381)

などの例が若干見える。

一音節の A 型象声詞は不安定なので、「A 的一声」のようにあとに数量詞をとまって状語とし

て用いられるようになって増加してきた。「講唱文学」などによく用いられ、口語的色彩が濃い。

- ④ 平兒嗤的一聲又笑了。(紅 44. 613)
- ⑤ 眼前發暈，咳嗽了一陣，哇的一聲吐出一口血來。(紅 93. 1323)
- ⑥ 邁步出門，嗖的一聲，縱上房去，又一縱，便上了那座大殿。(兒 6. 66)
- ⑦ 他聽了這話，心裏轟的一聲，立刻連手脚都軟了。(兒 40. 580)

構造助詞「的」をとみなわない場合もある。

- ⑧ 那班婦女見老爺斷的這等準，轟一聲都圍上來了。(兒 38. 527)

『紅樓夢』の A 型象声詞はほとんどが「噹的一声(6)」「拍的一響(87)」「嗤的一笑(32)」のように数詞と結びついて用いられ、用法が固定している。ところが『兒女英雄伝』の A 型象声詞は「A 的一声」のほか、「A 的(現代語では「地」)」として直接動詞の状語となったり、

- ⑨ (登九公)早把手裏的酒杯吧的往桌子上一放，說：……(兒 15. 164)
- ⑩ 外邊後來的報喜的都趕到了，轟的擁進大門來，嚷成一片。(兒 35. 474)

文の途中に挿入されたり、

- ⑪ 忽然正西上，哧，飛過一枚鏢來，正奔了那十三妹的胸前。(兒 15. 168)
- ⑫ 說着，抓起那瑪瑙酒盃來，喇，往着門外石頭台階子上就摔了去。(兒 30. 386)

現代語の A 型象声詞と変わらぬ幅広い使い方がなされている。「A 的 V」は「A 的一声」を用いるより緊迫感をもたらすし、象声詞を文の途中に挿入すると、生き生きした語り口調となり、読者(聞き手)に音を強く印象づける。

『兒女英雄伝』ではそのほか「吧的一脚(6)」「嘆的一口(6)」のように、動量詞との結びつきもあって、A 型象声詞の用法の広がりを示している。また、「忽的一下」のように動量詞「一下」をとめない、「サッと」とか「パッと」とかいった動作や変化の素早さを表すものがある。現代語では「A 的一声」が音を、「A 的一下」が動作を示すものとしておおむね区別する。ところが二書では『兒女英雄伝』に「唬嚇的一下子(7)」の例が 1 つあるだけで、「A 的一下」は見られない。このような象声詞の擬態語的用法はすべて「A 的一声」で表される。「一声」とあるからといって、必ずしも音を表しているわけではない。現代語の用法と対比してあげてみる。

- ⑬ (襲人)便起身拿一領斗篷來替他剛壓上，只聽“忽”的一聲，寶玉便掀過去，也仍合目裝睡。(紅 21. 290)
 - ⑭ 天明的時候，我睡得正香，忽然聽見有人推開門闖進來，“呼”一下就揭開了我的被子。(『小學課本語文』7. 50)
 - ⑮ (那和尚)不料這酒潑在地下，忽然間唵的一聲，冒上一股火來。(兒 5. 55)
 - ⑯ 馬老爹心里的火忽地一下就冒上來了。(『北京文学』1988・2)
- ⑬は「パッとマントをはねのける」、⑭は「パッとフトンをめくる」、⑮⑯は「怒りがむらむらとこみあげてきた」の意である。

2. 2 AA 型 (表 2)

2. 2. 1 AA 型象声詞は大きく二つに分けられる。一つは「隆隆 (lónglóng)，喃喃 (nánán)，訥訥 (nènèn)，颯颯 (sāsā)，淅淅 (sīsi)，簌簌 (sùsù)，噉噉 (qīqi)，喁喁 (yúyú)」の類で、古代から大量に用いられてきた定型の AA 型である。これらは現在でも書面語として用いられるが、現代語の象声詞が一般に第 1 声で発音されるのに対し、それぞれ固有の声調で発音される。また単音節(A)に分離できない。歴史が古いだけに音の印象が薄まり、概念語化が進んでいる。

表 2

紅樓夢前 80 回	紅樓夢後 40 回	兒 女 英 雄 伝
〈人や動物の声〉		
嗷嗷(1), 哈哈(6)*, 呵呵(8), 哼哼(2), 忽忽・惚惚(2), 喃喃(1), 嘻嘻(10)*	哈哈(4)*, 呱呱(1), 噉噉(1), 嘻嘻(4)*, 吱吱(1)	啊啊(1), 吃吃(1), 沸沸(1), 噉噉(1), 格格(笑い声: 1), 哈哈(27), 呵呵(13), 哼哼(2), 喃喃(1), 嗚嗚(1), 嘻嘻(5), 吁吁(1), 喂喂(2), 噉噉(1), 嘖嘖(3)
〈物音〉		
嗤嗤(1), 噹噹(1), 刷刷(1), 漸漸(1), 突突(4)	簌簌(2)	噹噹(1), 瑟瑟(1), 格格(打ち当たる音: 1), 唼唼(1), 隆隆(1), 拍拍(2), 撲撲(1), 颯颯(1), 騰騰(1), 突突(2)
計 12(38)	6(13)	24(73)

注) 参考までに AA 型の象声詞を人や動物の声と物音とに分けてみた。

⑰ 看了一回, 不覺得簌簌淚下。(紅 87. 1248)

⑱ 金風颯颯, 玉露冷冷。(兒 4. 35)

もう一つは、「噹噹, 忽忽, 拍拍, 撲撲, 騰騰, 吱吱」の類で, A 型を重ねて連続した音を描写し, 話し言葉で盛んに用いられる。

⑲ 說着, 只聽外間房中十錦格上的自鳴鐘, 噹噹兩声。(紅 51. 716)

⑳ 耳邊只聽得唼唼的風声, …… (兒 22. 256)

小学校国語教科書に使用される象声詞のうち, AA 型が約 3 分の 1 を占めるという (何晨 1983)。

二書の AA 型ではもっぱら AA 型で用いられる定型のものが多く, 変化に乏しい。先に挙げたもののほか, 「哈哈, 呵呵, 格格, 嘻嘻 (以上笑い声)」や「噉噉 (鵝鳥のガーガー), 呱呱 (カラスのカーカー), 哼哼 (蚊のブンブンやうめき声), 噉噉 (犬のキャンキャン)」など人や動物の声も一般に重ねて用いられる。人の声は二書に共通して用いられるものが多い。表 1 の A 型の重ね型とみられるのは「嗤嗤, 噹噹, 唼唼, 拍拍, 撲撲, 騰騰」で, みな物音である。

2. 2. 2 A 型又は AA 型に更に音節を重ね, 3 音節又は 4 音節以上にして用いる場合がある。

表 2'

紅樓夢前 80 回	紅樓夢後 40 回	兒 女 英 雄 伝
哼哼哼(1) 嗡嗡嗡嗡(1)		噹噹噹(2) 蹬蹬蹬(1), 哆哆哆(1), 呵呵呵(1), 嗚兒嗚兒嗚兒(2), 嘖嘖嘖(3), 喳喳喳(1), 哆哆哆哆(1), 咯咯咯咯(1), 哼哼哼哼(1), 踏踏踏踏(1)
計 2(2)	0(0)	11(15)

②① 薛蟠便唱道：“一個蚊子哼哼哼”……薛蟠還唱道：“兩個蒼蠅嗡嗡嗡嗡”。(紅 28. 397)

②② 說話間，只聽得噹噹噹一片鑼響，撻拉拉撻拉拉船篷，……(兒 22. 254)

②①は韻文で、蚊とハエの羽音（ブンブンブン）を対句にしてある。『紅樓夢』にはこの例しかない。②②はドラの音を3つ重ね、後文の3音節の象声詞「撻拉拉」とリズムを合わせたものであろう。二例とも作者の何らかのバランス感覚が働いている。鈴木和子(1988)はAAA型について「修辭的色彩が強く、詩文や“評書”などの口頭文芸に多く使用される」と述べる。二書の例を見ると、詩文を取り入れて少し古雅な文体の『紅樓夢』、評書の形式を取り入れた『兒女英雄伝』の特色とかかわって、AAA型が用いられているのは興味深い。『兒女英雄伝』には、3音節、4音節……と重ねた象声詞が幾つか見られるが、このような中国語の語構成のワクからはみ出していく象声詞の使用は、北京語の単語の多音節化の傾向(陳文彬 1958)ともあわせて、『兒女英雄伝』における口語化の深まりを示したものと見える。

2. 2. 3 r化音(語尾の捲舌化)は北方語の特徴であり、特に北京語ではきわだつ。孟琮(1983)は「北京話的擬声詞」の“擬声詞表”に現代北京語の象声詞を紹介するが、A型68語のうち38語、AB型233語のうち88語がr化が可能とする。二書に見られる。r化した象声詞は、数は少ないが文献に見られる初期のものである。

②③ 林黛玉道：“我纔出來，他就忒兒一聲飛了。”(紅 28. 402)

②④ 拿絹子捂了臉，就‘嗚兒嗚兒嗚兒’的放声大哭起來了。(兒 40. 580)

②⑤ 他便忒兒嘍忒兒嘍的吃了些。(兒 29. 372)

その他、「忒兒嘍嘍(兒 4)」「得兒楞楞得兒楞楞(兒 15)」が見える。ところで、『兒女英雄伝』からほど遠からぬ1905年(明治38年)に出版された瀬上恕治(1905)『北京官話万物声音』に集められた象声詞は、「噹兒噹兒，根兒根兒，咕兒咕兒，嘿兒嘿兒，吱兒吱兒，咕啞兒咕啞兒」など、r化の連続するものが30数語もある。この書は例文が会話体である。『紅樓夢』『兒女英雄伝』でr化の象声詞が少ないのは、書きことばという文体の影響もあると考えられる。象声詞のr化は一般に軽い語気をそえることが多い。

2. 3 AB型

表3

紅樓夢前80回	紅樓夢後40回	兒女英雄伝
玎璫(3), 啞嚕(1), 咯噔(3), 咯吱(1), 咕咚(4)*, 咕唧(3)*, 咕嚕(1)*, 豁唧(2), 唧咕(1), 鏗鏘(3), 礮礮(1), 撲哧・撲哧 (2)*, 唼喋(2), 浙瀝 (1)	叮咚(1), 咕咚 (4)*, 咕唧(1)*, 咕嚕(1)*, 嘩唧 (1), 撲哧(4)*	吧嗒(1), 巴嗒・巴嗒(2), 哧溜 (1), 叮噹(1), 啞嚕(1), 噶拉・噶 拉(2), 跔嗒(1), 咯蹬(2), 咕咚 (11), 呱呱(2), 咕咕(1), 咕嚕 (1), 咕嚕(2), 嘩啦(1), 唼搭(1), 唧溜(1), 咯吧(2), 唼嚕(3), 唼喳 (1), 鏗鏘(2), 嘩哧(1), 撲通・撲 通(2), 噉測(1), 噉喳(2), 叭啞 (1), 唏溜(2), 窸窣(1), 吱嘍(1)
計 14(28)	6(12)	28(50)

2. 3. 1 AB型の象声詞は先秦の文献には幾つか散見されるだけだが、漢代以降、漢語の複音

節化の趨勢にともない大量に生まれた。異なる二つの音節によって作られ、やや複雑な一つの音を表す(単純語)。繰り返すと ABAB 型に、種類によっては ABB 型、AABB 型などを作ることができる。一つの音を表すので、A 型と同じく「AB 一声」と数量詞と結びついて、状語として用いられることが多い。

②⑥ 兩下失誤，豁啷一声，茶碗落地，潑了一身一地的茶。(紅 80. 1152)

②⑦ 那河台聽了這話，纔咕咚一声把心放下去。(兒 13. 135)

現代語では 4 音というリズムの関係もあり、構造助詞「的」は入れないのが普通である。『紅樓夢』は大体そうだが、『兒女英雄伝』では、「跼踏的一声(4)」「咯噔的一声(6)」「巴達的一声(6)」「咕嚕的一下子(7)のように「的」を介在させる場合が約 3 分の 1 を占める。

2. 3. 2 AB 型象声詞のアクセントは B にあるが、動詞として用いられると、B は軽声となる。AB 型が動詞化する場合は、『紅樓夢』では、

②⑧ 衆媳婦都說：“姑娘們，罷呀，天天見了就咕唧。”(紅 60. 847)

②⑨ (毛半山)低着頭又咕嚕了一会子，便說……(紅 102. 1428)

など、人の声を表すごく一部の象声詞（ほかに「咕唧，唧咕」）に限られるが、『兒女英雄伝』では、『喊喳了幾句(16)」「唧溜了半天(32)」などのほか、

③⑩ ……，只覺得一個冰涼挺硬的東西在嘴唇上味溜了一会子，嚇了一跳。(兒 4. 38)

③⑪ 幸虧他是個羊臄，咕嚕了會子，竟不會響動。(兒 29. 372)

③⑫ 至於安公子，空吧嗒了幾個月的嘴，……(兒 25. 305)

③⑬ 說罷，這纔甩着雙寬袖口兒，咯噔着兩隻小底托兒，得意洋洋的去了。(兒 38. 515)

③⑭ 那等熱天，他會把碗滾開的薑湯唏溜下去竟不怎的不算外，……(兒 37. 500)

など、人の声以外の音を表す象声詞も、「了，着，下去」などを付して動詞化して用いられ、使用の広がりが見られる。

2. 4 ABB 型

表 4

紅樓夢前 80 回	紅樓夢後 40 回	兒 女 英 雄 伝
<u>噌拉拉</u> (1), <u>嘩唧</u> <u>唧</u> (1), <u>豁刺刺</u> (1), <u>豁唧唧</u> (1), <u>忒楞楞</u> (1)	<u>噌碌碌</u> (1), <u>唸唸</u> <u>唸</u> (2), <u>撲簌簌</u> (3), <u>唧唧唧</u> (1), <u>吱嚕嚕</u> (1)	<u>鏜唧唧・噹唧唧</u> (5), 得兒楞楞(2), 滴溜溜(1), 噶啦啦(1), 噶吱吱 (1), <u>咕咚咚</u> (4), <u>咕唧唧</u> (2), <u>咕嚕</u> <u>嚕・咕碌碌</u> (3), <u>撻拉拉・嘩拉拉</u> (2), <u>唸嚕嚕</u> (1), <u>拍唸唸</u> (2), <u>鏜唧</u> <u>唧</u> (3), <u>簌落落</u> (1), <u>忒楞楞</u> (4), <u>忒</u> <u>兒嚕嚕</u> (1), <u>哇呀呀</u> (2), <u>吱嚕嚕</u> (1)
計 5(5)	5(8)	17(36)

ABB 型の象声詞は、最も早くは唐代変文あたりから見えはじめ、特に元代の雜劇では大量に用いられ、「紇支支，骨嚕嚕，忽刺刺，忽嚕嚕，忒楞楞」など 50 余種類を数える。『元曲選』でのこの型の使用率は 29.1 % を占め、第 1 位という（趙金銘 1981）。『水滸伝』にも「跼踏踏，刮刺刺，骨碌碌，剝剝剝，勃唸唸，撲唸唸，不刺刺，忽刺刺，滴溜溜」などが見える。ABB 型は連続して鳴り響く音を象徴し、A が短い音の場合が多い。AB 型の重ね型と考えられる。しかし、すべての

AB 型が ABB 型に変えられるわけではなく、「喀吧吧，噗哧哧，鏗鏘鏘」などとはいえない。AB 型で完結せず，持続可能な音でなくてはならない。従って，二書の例を見ると「噤吱吱，咕咚咚，撲簌簌」を除き，BB がすべて「lala, langlang, lengleng, liuliu, lulu」と頭子音に辺音 l がくる音節である。l は流音ともいわれ，流動・回転・飛翔などの感を表すので，ABB 型や 4 音節の象声詞にしばしば用いられる。ABB 型の象声詞は AB 型の繰り返しである ABAB 型に較べてスピード感，緊迫感をともなう場合が多い。

③⑤ 只聽嘩唧唧一声，砸在桌上，書本紙片等至於筆硯之物撒了一桌，……（紅 9142. 己卯本などには「豁唧唧」）

③⑥ 一个小子見問，咕咚咚就撒脚跑了去打探。（見 18. 205）

③⑦ 他也不管那酒的冷熱，雙手端起來，咕唧唧一氣而飲盡，……（見 32. 413）

③⑤はガラガラッと物を取り落とす音。③⑥はバタバタと走る音。③⑦はゴクゴクッと一氣に飲み干す音である。

二書についてみると ABB 型象声詞は『紅樓夢』ではあまり使われない。しかも前 80 回と後 40 回で共通して用いられるものもない。これに対し『兒女英雄伝』では物音を描写するのに盛んに用いている。

2. 5 AABB 型

表 5

紅樓夢前 80 回	紅樓夢後 40 回	兒女英雄伝
叮叮噹噹(1)*, 嘟嘟囔囔(1), 咕咕唧唧(1), 咕咕唧唧(3)*, 咕咕囔囔(3)*, 哼哼唧唧(1)*, 唧唧嘟嘟(1), 唧唧咕咕(1)*, 咕咕呱呱(5)*, 唧唧囔囔(1)*, 瀝瀝浙浙(1), 噉噉喳喳(3)*, 嗚嗚咽咽(4)*, 嘻嘻哈哈(1), 浙浙瀝瀝(1)	叮叮噹噹(1)*, 嘟嘟囔囔(1), 唏唏哧哧(1), 咕咕唧唧(5)*, 咕咕囔囔(2)*, 哼哼唧唧(1)*, 唧唧咕咕(1)*, 咕咕呱呱(1)*, 唧唧囔囔(1)*, 啾啾唧唧(1), 噉噉喳喳(1)*, 嗚嗚咽咽(5)*, 浙浙颯颯(1)	哼哼唧唧(1), 咕咕喀喀(1), 喃喃呐呐(1), 噉噉測測(1), 噉噉喳喳(1), 嗚嗚咽咽(2)
計 15(28)	13(22)	6(7)

2. 5. 1 この型は繰り返し反復する声や音を表す。『紅樓夢』に多く，小声でつぶやくような人の話し声を描写するものが特に多い。作者がいかにか会話に意を用いていたかがわかる。これらの人の声を描写する AABB 型象声詞は「唏唏哧哧（息の音）」を除き，ABAB 型に変えられないし，「嘻嘻哈哈（笑い声），咕咕呱呱（談笑の声），喃喃呐呐（小声でつぶやくさま）」を除き，AB 型にして，それを動詞として用いることが多い。すでに概念化・擬態語化・実詞化の傾向が強く，他の AABB 型，例えば「叮叮噹噹」や現代中国語で用いる「劈劈啪啪」などとは性質を異にする。

③⑧ 兩個人隔座咕咕唧唧的角起口來。（紅 9. 140）

ところで不思議なことに『兒女英雄伝』に見える AABB 型象声詞はすべて人の声を表すもので，物音を表すものは 1 例もない。『紅樓夢』でも大部分が人の声を表すもので，物音は，

③⑨ 叮叮噹噹，只聽得腕上的鐲子響。(紅 62. 873)

④⑩ 不想日未落時天就變了，淅淅瀝瀝下起雨來。(紅 45. 626)

の2例のみ，後40回も同じで物音を表すものは「叮叮噹噹，淅淅瀝瀝」の2語が見えるだけである。「叮叮噹噹」は『水滸伝』にも見える。また『北京官話万物声音』にも，AABB型は「淒淒嗒嗒(=噉噉嗒嗒)，嗒嗒嗒嗒」の2語しかあげられていない。どうやらこのAABB型象声詞は当時まだかなり限定的にしか用いられていなかったようである。「咕咕唧唧——唧唧咕咕」「淅淅瀝瀝——瀝瀝淅淅」と複合の順序のゆるやかさもみられる。

2.5.2 AABB型は形容詞の状態描写形式に似て，音声の映像描写転化に特色があり(鈴木1988)，現代語では少しずつふえてきた。しかし，すべてのAB型がAABB型に展開できるわけではなく，二つの単音節象声詞の並列からなる複合象声詞(「叮噹」など)は展開できるが，AB型の中でもAとBの音節の結びつきが緊密で，合わせて一つの語素とみなされる「当啷，咕咚，呱咕，吭嘹，撲通」などは一般にはAABB型に変えることができない。

現代の普通話では，二種のAA型を恣意的に合成し音の表現効果を高めたものが小説などに多く見られるようになってきた。音節の組み合わせにどうしても制限がある中国語では，旧来のA型・AB型や或いはその重ね型ではさまざまな音に細かく対応しきれない面がある。そこで二種の音を合成し，4音節の新しい象声詞?を作り出すのである。畑いつみ(1989)はこういった恣意的なものも含めて，122語のAABB型象声詞を集めている。清代北京語に較べて，その流行ぶりがわかる。もちろん「嗖嗖吱吱(風の音と機械の音が混じった音)」などは社会的に認定され，通用するとは思われないが，現代中国語象声詞の新しい側面として，注目してよいと思う。

2.6 ABAB型

表6

紅樓夢前80回	紅樓夢後40回	兒女英雄伝
咯噹咯噹(1)， 咕咚咕咚(2)	嘩喇嘩喇(1)	噉楞噉楞(1)，叮噹叮噹(1)， 唵唵唵唵(1)，咕咚咕咚(2)， 咕啷(1)，咕嚕咕嚕(1)， 唏唏唏唏(2)，嘩啷嘩啷(1)， 唵嚕唵嚕(2)， 撲唵撲唵(2)， 忒兒嚕忒兒嚕(2)
計 2(3)	1(1)	11(16)

ABAB型はAB型の繰り返しであり，2回の音又は連続した音を描写する。現代語ではほとんどすべてのAB型はABAB型に変えることができ，ごく普通の型である。しかし，清以前ではまれであって，元曲や水滸伝にはほとんど見られない。『紅樓夢』にも少ないが，その4例は次のようなものである。

④⑪ 劉姥姥只聽見咯噹咯噹的響聲，大有似乎打籬櫃篩麵的一般，不免東瞧西望的。(紅 6. 100)

④⑫ (那小丫頭)擡起腳來，咕咚咕咚又跑了。(紅 26. 361)

④⑬ (興兒)連忙把帽子抓下來在磚地上咕咚咕咚碰的頭山響，口裏說道：……(紅 67. 958)

④⑭ 那丫頭道：“我纔剛到後邊去叫打雜兒的添煤，只聽得三間空屋子裏嘩喇嘩喇的響，我還道是貓兒耗子，……(紅 88. 1267)

④①は劉姥姥が時計の音を聞きつけた時、④②④③④④はいずれも身分の低い者に関する動作、及び会話の中に出てくる象声詞である。『兒女英雄伝』でかなりふえるが、

- ・時計や楽器の音—叮嚙叮嚙，噎楞噎楞，咕咚咕咚，嘩唧嘩唧
- ・頭を地に打ちつける音（＝④③）—咕咚咕咚
- ・口や鼻から出る音（ゴクゴクなど）—咕嘟咕嘟，呖呖呖呖，唸嚙唸嚙，嘆呖嘆呖，忒兒嚙忒兒嚙
- ・満州語を話す様子—咕嚙咕嚙，咕喇咕喇

など、もっぱら連続する音であるのみならず、一種の目新しさ、俗っぽさ、なまなましさをともなうて使用されているようだ。ちなみに満州語を話す様子が、

④⑤ 他們在那裏翻清話，咕嚙咕嚙，我們不懂。（見 35. 459）

④⑥ 誰知老爺從這句話一岔，就咕喇咕喇合他說了一套滿州話。（見 40. 578）

と象声詞が違うのは、第 40 回が作者が異なるためと思われる。

ところが、『北京官話万物声音』になると、

④⑦ 可憐見兒的那個小孩兒爲甚麼在大街上噶喇噶喇的直哭。

（不憫なことあの子供は何ぜに大通りでカラーカラー〔発音記号略—筆者注〕と哭きつづけて居るのでしょ。）

④⑧ 廠車是咣嚙咣嚙的聲兒。（大八車はクワンタンクワンタン〔同上〕と音がします。）

のような ABAB 型の用例が圧倒的に多い（AB 型 10 例，ABAB 型 33 例）。これはおそらくこの書の例文が会話体であるためであろう。ABAB 型が強い口語性をもった象声詞の型で、清代になって徐々に多用されるようになっていく様子が見えてくる。

2. 7 ABCD 型ほか

表 7

紅樓夢前 80 回	紅樓夢後 40 回	兒 女 英 雄 伝
〈ABCD 型〉		
嚙嚙嚙嚙(1)	唏嚙嚙嚙(1)	嚙楞嚙嚙(1)，噎嚙扎嚙(1)， 唏嚙嚙嚙(1)，嚙嚙嚙嚙(1)
〈ABCB 型〉		
		咕嚙略嚙(1)，唏嚙嚙嚙(2)
〈ABAC 型〉		
略嚙略嚙(1)		
〈その他〉		
		扎嚙嚙，扎嚙嚙，扎嚙扎嚙扎 嚙嚙（漁鼓の音：1）
計 2(2)	1(1)	7(8)

ABCD 型・ABCB 型・ABAC 型は子音や母音の交替を利用して「不ぞろいな音，多種類の音，わけのわからない音」を描写している。4 音節ともなると一つの単語としては長く、まとまりを欠くため、双声や疊音や辺音(1)を利用して発音をできるだけなめらかにする。母音も前半に i，後半に a などと鋭から鈍へと並べる場合が多い。それでも他の象声詞の型と違って語音や表記が不安定であり、変形が多い。孟琮（1983）は現代北京語の ABCD 型を変形も含めて 101 語挙げている。

しかし、二書にはこれら4音節の型は少ない。うち『紅樓夢』には3例が見える。

④⑨ 一語未了，只聽得屋內唏溜嘩喇的乱響，不知是何物撒了一地。(紅 64. 908)

⑤⑩ (園內的風) 穿過樹枝，都在那裏唏溜嘩喇不住的響。(紅 87. 1247)

⑤⑪ 這竹子橋規矩是咯吱咯喳的。(紅 38. 517:「程本」では「咯吱咯吱」とする)

これらは『元曲選』に「吸里忽刺(殺狗勸夫)，吸留忽刺(魔合羅)」、『水滸伝』に「四肢肱察(6回)」と同種類の象声詞が見えるので、元・明以来用いられている象声詞で、特に新しいものではない。

3 ま と め

以上、『紅樓夢』と『兒女英雄伝』の象声詞の型について、その特徴を具体的に考察してきた。

『紅樓夢』前80回の象声詞は『兒女英雄伝』に較べると数が相当少ない。文語や元・明以来の象声詞を使用することが多く、型はA型、AA型、AB型、AABB型でその大半を占めている。用法は型通りのものが多く、『兒女英雄伝』のように多様で自由な使い方はなされていない。これは『紅樓夢』前80回の記事が全体的に文語臭が強く、上品な文体であることや、曹霑が視覚的描写の方に意を用いたことにもよろうが、成立年代の違いも見逃せない。人の声を写したAABB型の象声詞がたくさん使われるのは前80回の特徴として注目される。

『紅樓夢』後40回は、使用頻度が前80回より幾分多い程度で、象声詞の型や用法についてはそう違いはない。ただ幾つかの場面での象声詞の使用は印象的である。

⑤⑫ (黛玉) 翻來覆去，那裏睡得着。只聽得外面淅淅颼颼，又像風聲，又像雨聲。又停了一會子，又聽得遠遠的吶呼聲兒，却是紫鵲已在那裏睡着，鼻息出入之聲。(中略) 正要朦朧睡去，聽得竹枝子上不知有多少家雀兒的聲兒，啾啾唧唧叫個不住。(紅 82. 1184)

病身の林黛玉のとぎすまされた耳に入ってくるさまざまの音を象声詞を交えて巧みに描き出している。後40回の作者は音に敏感である。前80回と後40回の象声詞の種類は一般的なものは重なるが、ほとんど一致しない。表記・表音の違うものもあり、作者の違いを示している。

『兒女英雄伝』では、活劇部分に象声詞が盛んに用いられる。その型はA型、AA型、AB型に加え、ABB型、ABAB型、AAA(A)型までもバランスよく用いられ、現代語の象声詞と似たような傾向を示す。口語の象声詞がふえ、音節の長いものが増えて、『紅樓夢』と較べると、時には冗漫な印象を受けるくらいである。用法も多様、文中における位置もかなり自由で、象声詞使用の幅がかなり広がっている。

このように同じ清代北京語といっても『紅樓夢』と『兒女英雄伝』の象声詞には相当の違いがあることがわかった。あわせて、現代中国語象声語の型の特徴やその変遷も若干考察できた。ただ二書だけではまだデータが少ないし、清以前の象声詞の状況もよくわからない点が多い。今後の課題としたい。

最後に象声詞の型の消長を概観するために「中国語象声詞の型の分布」の表をあげた。比較の対象として同じ北方語系『元曲選』(藏懋循, 1616)を調べた趙金銘(1981)の統計、相原茂(1976)「現代中国語擬音語小辞典」を調べた玉村文郎(1979)の統計、畑いつみ(1989)が分類紹介した現代小説などより採集した象声詞の表を利用した。

表 8 中国語象声詞の型の分布

資料 型	元曲選	紅樓夢 前 80 回	紅樓夢 後 40 回	兒女英雄伝	現代中国語 擬音語小辞典	畑(1989)
A	(4.5)	10(16.1)	8(20.0)	16(13.4)	37(14.0)	82(10.6)
AA	(28.3)	12(19.4)	6(15.0)	24(20.2)	60(22.7)	118(15.2)
AAA	(5.0)	2(3.2)		11(9.2)	1(0.4)	
AB	(9.1)	14(22.6)	6(15.0)	28(23.5)	64(24.2)	181(23.3)
ABB	(29.1)	5(8.1)	5(12.5)	17(14.3)	28(10.6)	69(8.9)
AAB					5(1.9)	12(1.5)
ABC	(3.3)				1(0.4)	5(0.6)
AABB	(7.0)	15(24.2)	13(32.5)	6(5.0)	24(9.1)	122(15.7)
ABAB		2(3.2)	1(2.5)	11(9.2)	32(12.1)	150(19.3)
ABBC	(5.4)					
ABCD	(8.3)	2(3.2)	1(2.5)	6(5.0)	12(4.5)	38(4.9)
種類計		62	40	119	264	777

注)『元曲選』の数字は使用頻度を調べたもので参考にとどめる。ABCD 型の中には ABCB 型・ABAC 型も含む。『兒女英雄伝』の AAA 型には 4 音節以上重ねるものも含めた。() 内は百分率である。

参 考 文 献

- 1) 耿二嶺 1986.『漢語擬声詞』。湖北教育出版社。
- 2) 何晨 1983.「象声詞及其教学」,『小学語文教師』1月号,81-84頁。
- 3) 鈴木和子 1988.「“象声詞”のタイプと音声描写特徴」,『駒沢大学外国語学部論集』第27号,121-135頁。
- 4) 孟琮 1983.「北京話的擬声詞」,『語法研究和探索』(一)。北京大学出版社,120-156頁。
- 5) 瀬上恕治 1905.『北京官話万物声音』。北京:德興堂印字局。
- 6) 趙金銘 1981.「元人雜劇中的象声詞」,『中国語文』第2期,144-146頁。
- 7) 馬慶株 1987.「擬声詞研究」,『語言研究論叢』第4輯。南開大学出版社,122-155頁。
- 8) 陳文彬 1958.「北京話多音詞發展的趨勢和速度——從三部小說的抽查中的一个測驗——」,『中国語文』第4期,197-198頁。
- 9) 相原茂 1976.「現代中国語擬音語小辞典」,『中国語』11月号,2-11頁。
- 10) 玉村文郎 1979.「日本語と中国語における音象徵語」,『大谷女子大國文』第9号,1-7頁。
- 11) 畑いつみ 1989.「中国語の象声詞の音声的形態による分類」,『中国学志』蒙号,1-33頁。
- 12) 太田辰夫 1974.「『兒女英雄伝』の言語」,『日本中国学会報』第26集,141-156頁。
- 13) 傅希孟 1985.「浅談《兒女英雄伝》中疊詞的運用」,『語言教学与研究』第2期,141-153頁。